

<文献紹介>川島哲郎編著『経済地理学』 石井章著  
『メキシコの農業構造と農業政策』

著者	周 濱, 福元 雄二郎
出版者	法政大学地理学会
雑誌名	法政地理
巻	15
ページ	88-89
発行年	1987-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00026088">http://hdl.handle.net/10114/00026088</a>

## 経済地理学

川島哲郎編著 朝倉書店 1986年 3900円

経済地理学についての各専門分野の書は数多くあり選ぶに事欠かないが、狭い専門分野を越えた経済地理学の概説について知りたい時、どの書をあたらよいのだろうか。その全般的な内容を取り扱っているのが本書である。本書は経済地理学を、経済の地域的形象、すなわち経済諸現象の地域的な展開と連関、それを通じて形づくられる経済の地域構造を、理論的に分析・解明する学問とみる立場に立て論じている。地域構造全般、農業、工業、商業の地域構造について取りあげるほか、さらに経済の地域的形象を多面的、かつ全体的に把握されるように狭い産業分野にとどまらず、経済の中核機能や所得の問題、経済の地域的形象の基礎条件であるとともにその投影でもある国土利用の問題、国際分業を軸とする国際的な連関などの今日の問題や、理論と政策の不可分性も重視して地域政策の項も設けてある。このように読者が経済地理学について総合的に理解できるよう配慮された概説書であるといえよう。

具体的な構成としては、全10章から成り、「1. 経済地理学の課題と方法」(川島哲郎)の「経済地理学が地理学と経済学との2つの学問分野にまたがり、しかも単純な学際的科学といえないとするとその性格はどのように理解すべきであろうか。また経済学とどのような関係をもち、どういう位置を占めるのか」という経済地理学への原初的な問題提起で本書の第1章は始まる。それを受けて「2. 産業構造の展開と経済の地域構造」(矢田俊文)では国民経済の地域構造に焦点をあて、産業資本主義段階、独占資本主義段階、成熟資本主義段階の各段階ごとにみられる地域構造とはいかなるものかを濃縮して述べる。1.が経済地理学への扉であるなら、この章は総論ともいえる位置にある。

以下、「3. 農業地域構造の形成と変動」(藤田佳久)は農業地域構造の諸理論へのアプローチと、現段階の農業地域構造の構図をそのメカニズムとともに描く。本章は易しくわかりやすい。「4. 工業地域構造の形成と変動」(松橋公治・富樫幸一)では、工業の空間的発

展の法則性を追究した工業立地諸理論の検討を試み、工業地域構造の形成・変貌を日本資本主義発展との内的連関を重視しつつ考察し、さらに他の先進資本主義との国際比較も行なっている。「5. 商業・サービス業の地域構造の形成と変動」(山口不二雄)は、クリスタラーやレッシュ、バックリンらの理論を検討し、日本における理論と実態を探るという興味深いものである。

続く「6. 経済中核管理機能の地域構造の形成と変動」(青野寿彦)以下は本書のユニークな部分である。6.では企業本社の立地の特性、支社・研究機関の立地は何に規定されるのかをとりあげ、経済中核管理機能を企業の諸活動における機能としてとらえ、その地域的配置にみられる特徴や傾向を考察する。「7. 所得の分布と変動」(山本健児)は所得の地域構造をとりあげている。経済地理学において所得をみることは経済力や経済水準を測定するための重要な尺度の1つといえる。本章では地域間格差に関する諸説を紹介し、計算式を用いて地域間格差の変動をみているが、地理の学生には、やや難解かもしれない。その他、「8. 国土の保全と利用」(松原 宏)、国際経済と国民経済と地域経済とのかかわりを明らかにする「9. 国際分業の進展と地域構造の変動」(山川充夫)、「10. 地域政策」(辻 悟一)の各章がある。

本書では交通地理を除けば経済地理学の諸分野がほぼ満遍なくとりあげられ、各章とも史的発展過程の分析を重視し、また発展の段階と過程を異にする諸国間の比較もされており、たいへん読み易く経済地理学への入門書としても適していると思われる。構成は全体として統一されているものの章ごとに独立した内容も持っており、興味の方向に応じて必要な章を選択して読むことも可能である。

経済地理学に興味を持つ会員諸氏にも一読をおすすめする。なお、執筆者の一員である矢田俊文氏は元法政大学経済学部教授、山本健児・山口不二雄の両氏は本会会員である。(周 濱)

## メキシコの農業構造と農業政策

石井 章著 アジア経済研究所 1986年

ラテンアメリカの農業構造で特徴的なのは、少数のラティフンディオ（大土地所有者）が大部分の土地を所有する一方で、多くのミニフンディオ（零細農）が存在する、土地所有の二重構造である。

第2次大戦後、ラテンアメリカ諸国の多くは、農業政策の柱として、この二重構造の是正を掲げ、農民への土地再分配を最優先する「農地改革（または土地改革）」を行って来た。

しかし、農民への土地再分配は、農業構造自体の変革を意味し、その上に構築されたラテンアメリカ諸国の政治体制の否定にもつながりかねない。また、各国とも急激な人口増加に対応するために食糧増産の必要性に迫られるようになった。そのため、1960年代以降、農業構造自体には手をつけず、農業生産力の向上に主眼を置いた「農業近代化政策」が農業政策の主流となったのである。

その後、「農業近代化政策」は国内向けの食糧から外貨獲得のための輸出作物に重点が転換された。そのため基本的食糧の不足と輸入増大が再度問題化して来た。また、農業の資本主義化は農民層の両極分化をさらに拡大し、土地を持たない農業労働者を多く析出しており、「農業の危機」が改めて表面化して来た。

明らかに、ラテンアメリカ諸国の農業政策は、上記の2つの路線の間を揺れ動いて来ている。著者は長年、このような視点からメキシコの農業諸問題について取り組んで来た。本書は、「共同体」的土地保有形態を持つエヒードと、それを包括した資本主義経済間の矛盾が、メキシコ農業の最大の問題点であるという認識に立った上で、1980年代の同国の農業政策を紹介し、分析したものである。本書の構成は、第1部「農業の危機と二重構造」、第2部「ケース・スタディ」、資料1「農村統合開発国家計画 1985-1988」、資料2「メキシコの農業構造と農業発展」から成り、第1部と第2部はさらに7章から構成されている。

まず第1章「農業生産の危機」では、とうもろこし

などの基本的食糧作物の生産量低迷について分析し、その原因が、企業的農業経営層の有利な輸出作物への転作にあると指摘している。

第2章「農業の二重構造」は、全国レベルの統計から、農業の二重構造に伴う地域間格差を分析している。

第3章は「ロペス・ポスティーヨ政権下の農業政策」である。ポルティエーヨ政権期（1976～1982）は、「農業危機」的状況が顕著になった時期であり、「農業近代化」政策の見直しが迫られた時期でもある。本章では、その修正案として出された「メキシコ食糧計画」と「農牧業振興法」が説明されている。

第2部は、第1部の具体的事例として、ミチュアカン、シナロア両州で著者が行った調査結果報告である。

資料1「農村統合開発国家計画 1985-1988」は、デラマトリ現政権の農業政策を要約したものである。

資料2「メキシコの農業構造と農業発展」は、1974年にレイエス・オソリエ他によって書かれた報告書の要約を行ったものである。著者は既に同書の要約を10年前に行っている。今回、改めて資料としたのは、60年代前半のデータで書かれた同書が、今日の農業問題の背景を正しく理解するうえで有意義であるという著者の考えによるものであり、著者の研究姿勢を伺うことが出来る。

80年代後半に入り、債務状況の悪化などにより、ラテンアメリカ諸国の政治的緊張感が高まっている。農業政策の研究は、今後のラテンアメリカ情勢を予測するうえで不可欠な要素である。そのような意味で、主導的な立場にあるメキシコの農業政策の現状を紹介している本書は重要である。現行のデラマトリ政権の農業政策が資料という形でしか紹介されていないのは、本書の書かれた時期からすればやむを得ないことであろう。フィールドワークなどを通じた現行の農業政策に対する分析が、次の課題として著者に望まれている。

(福元雄二郎)